

『溺れるチェリーピンク』

著: 藍生 有

ill: 神葉理世

「うわっ」

落ちる、と思った。奇妙なほどゆっくりと体が傾いていくのが分かって、でもどうにもできない。

頭からプールに飛び込む、その衝撃を覚悟して目を閉じる。何か硬い物に当たった体がある場所で弾んだ。

「危ないですよ」

プールの中にいた勇真が司の体を抱きとめていた。司の膝は宙に浮いている。

「……ありがとう」

司を受け止めてもびくともしない、強(きょう)靱(じん)な体。水泳選手にしては細身に見えたけど、回された腕は太く、背中に触れる体の厚みに驚かされる。

「かなり濡れちゃいましたね」

「あ、うん。でもシャツだけだから」

上半身が濡れただけでよかった。体ごと落ちていたら、スラックスの後ろのポケットに入れた携帯電話も水没して使い物にならなくなるところだった。

「ごめんね。ちょっと考え事してたら、バランスを崩しちゃって」

「気をつけてください」

勇真に助けて貰ってその場に立ち上がる。それを確認してから、勇真もプールから出てきた。

「……司さん」

「何？」

勇真の視線は、司の首筋から胸元に張りついていた。肌に張りつくワイシャツがみっともないのだろうか。脱ぎたいけれど、着替えは持っていなかった。

「こっちに来てください」

勇真に腕を取られた。

「う、うん」

引きずられるようにして向かった先は、プール横にある男性用更衣室だった。

着替えがあるのだろうか。彼の服なら自分には大きすぎるけれど、裸よりはいい。そんなことを思って、更衣室のドアを開けた勇真に続く。

入口にかけられたカーテンをくぐる。更衣室の中へ入ったのは初めてだ。壁際にロッカーが並び、中央にはベンチが二本、並んで置いてあった。プールよりも湿っていて、独特のにおいがする。

「司さん」

目の前に立った勇真が唇を噛んだ。

「ずっと、お話したいことがあったんです」

「な、何？」

「俺、……」

勇真は司の腕を強く掴んだ。次の瞬間、いきなり強く抱きしめられていた。濡れた彼の体が密着される感覚に目を白黒させる。

「え、なに、どうしたの？」

一体何が起きているのか分からず、勇真の顔を見上げる。思いつめた表情の彼が、厚みのある唇を開いた。

「……好きですっ」

隙(すき)間(ま)がないくらい抱きしめられているから、勇真ががたがたと震えているのが分かる。その迫力により司は言葉を失った。

「司さんが好きです。大好きです」

首筋に顔を埋(うず)められる。肌に彼の熱い吐息がかかるのを感じて、我に返った。

「ま、待って」

慌てて彼を引き離そうとするけど、うまくいかない。仕方なく彼の耳に顔を近づける。

「勇真くん、落ち着いて。僕も君も、男だよ……？」

「そんなこと分かっています」

勇真が顔を上げた。瞬きを忘れたかのようにじっと司を見ている彼からは、冗談だという雰囲気がかけてもなかった。

「……好きです」

彼の顔が近づいてくる。

「やめっ……」

制止の言葉を塞(ふさ)ぐように、唇が重ねられる。柔らかくて温かな感触に体が震えた。

司にとって、これが初めてのキスだ。まさかその相手が、勇真になるなんて。

唇全体を舐(な)め回される。息苦しさで眉を寄せた。どうにか逃れようとしたけれど、大きくて力強い体の前ではなす術がない。

「んんっ」

息苦しさから我慢できずに開いた唇に、舌がねじ込まれる。熱く濡れた感触に体が竦む。

「っ……」

これは司が想像していたキスとは違う。貪りつくような勢いで、吐息まで奪われる。膝が笑って、思わず勇真にしがみついた。それを了承と受け取ったのか、勇真の舌が大胆に口内を行き来する。

他人の舌が、こんな感触だなんて知らなかった。きつく唇を吸われて、頭がくらくらと揺れる。

なんでいきなりキスをされているのか。考えようにも、頭の中まで勇真にかき回されてしまって、呼吸をするのが精一杯だ。

濡れて張りついたシャツの上から、胸元をまさぐられた。荒い息遣いに意識が飲まれる。首を揺らしてやっと唇が離れたと思ったら、今度はうなじに噛みつかれた。

「勇真くん、やめっ……」

彼の勢いが怖い。がちがちに強張った体を強く抱きしめられ、再び唇が重ねられる。噛みつくように歯を立てられて、指先にまで震えが走った。

「んっ……」

更衣室のドアが開く音が聞こえ、目を見開いた。この状態を誰かに見られたらまず

い。勇真の力がわずかに緩んだその際に、彼を突き飛ばす。

「……何してるの」

ドアの前には透真が立っていた。彼はわずかに眉を寄せ、後ろ手でドアを閉める。

全身から血が引いていく。まずい。透真に見られてしまった。どうやってこの場を説明しよう。男同士でキスなんて……。

「ち、違うんです。これは、その……」

勢いに飲まれたとはいえ、勇真とキスをしてしまった。その言い訳を考えていると、透真が口を開いた。

「そんなに濡れて、どうしちゃったのかな」

透真が問いかけた先は、司ではなく勇真だった。

「司さんがプールに落ちそうになったから助けた」

「へえ。それでここに連れ込んだの？ 一人で抜け駆けはしない約束だったのに？」

いつになく冷たい透真の声に怯(おび)え、司は体を丸めた。

「……ごめん」

勇真が頷(うな)垂(だ)れる。

「しょうがないな。まあいいけどね。どうせ今夜、司くんをかわいがるつもりだったから」

「主任……」

にこやかな笑顔と共に告げられた内容が信じられなくて、呆(ぼう)然(ぜん)と透真を見上げた。

「そんなに驚かないで欲しいな」

透真が更衣室に鍵をかけた。その小さな音が室内に響くほど、誰も何も言わない。

ゆっくりとこちらに近づいてきた透真は、司の前で屈(かが)み込む。

「僕たちの気持ちに気がついてなかった？」

「気持ちって……」

なんのことなのか見当すらつかなかった。自分の身に起きていることが信じられず、透真と勇真を交互に見やる。

「僕も勇真も、君が好きなんだ」

本文 p37～43 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>